

1980年代から2010年までの「ジェンダー」

——日本の定期刊行物における——

左古 輝人

0 本章の課題、対象と方法

本章は、1980年代から現代まで約30年間の日本の定期刊行物において、「ジェンダー」という語句が他の諸語句とのあいだに有した諸関係、およびその大局的な変遷過程を描き出す、言わば概念史の1つの試みである。

対象範囲を図書と行政文書に限れば、有力者（政治家、行政機関、専門家、研究者など）の議論の動向を見るには適するだろう。しかしジェンダーのように、群小の人々の言論と行動が重要であるような語句を考察するには、このような対象選択は必ずしも適さない。この点において定期刊行物は有利である。そこには有力者だけでなく、多種多様な人々の雑多な言論が含まれているからである。大衆雑誌は、放置しておけば何も語らないはずの人々に何事かを語らせることによって、大衆の刻々と移り変わってゆく関心に応えるものだ。団体の機関誌や広報誌は、当該団体の特定の信念、主義主張を流布するために刊行されるものだが、有力と言うには程遠いものも数多く存在する。各種のサークルや研究会、社会運動体などが発行する会報は、会員同士の情報共有、情報交換をもつばらの目的としている。こうした定期刊行物と似た特徴を有する媒体としては、日刊新聞の記事およびインターネットの掲示板、ブログなどもある。しかし日刊新聞は発行主体が定期刊行物に比べると圧倒的に少なく、インターネットの記事は著者や管理者、その他の人々によってあまりにも容易に書き換えや消去が可能のため、今回分析対象とすることは見送った。

図書と行政文書を対象とした研究はすでに存在する。井上輝子（2006）は国会図書館および東京ウィメンズプラザの所蔵図書および資料のタイトルに出現したジェンダーという語句の、1980年代から2000年代半ばまでの変遷について論じている。それによると、図書におけるジェンダーの初出は山本哲士編『経済セックスとジェンダー』（新評論1983年）であり、そこでのジェンダーはイヴァン・イリイチの紹介であった。ジェンダーの観点から社会的・文化的諸事象を研究するという意味におけるジェンダーの初出は江原由美子ほか『ジェンダーの社会学』（新曜社1989年）である。それ以降、図書は着実に増え続け、2000年代には毎年40点以上が刊行されている。

特に1995年から2000年にかけてジェンダーをタイトルに含む図書と行政文書の刊行点数は急増している。井上によればこれには4つの原因が考えられる。①ジェンダー研究の隆盛。②国際機関や政府、東京都などにおける用語の普及。女性問題からジェンダー問題への政策パラダイム転換。③性差別撤廃運動、学校教育における〈男女平等〉概念から〈ジェンダー〉（および〈ジェンダー・フリー〉）への移行。④男性や性的少数者の差別、抑圧に対する異議申し立てにジェンダーが使われる。

ジェンダーをタイトルに含む図書と行政文書の刊行点数は2002年から2003年にピークを迎え、その直後に急減している。この急減はバックラッシュの影響である。

本研究はこの井上説を1つの重要な指標とし、これが本研究から得られる知見とどの程

度一致するかを検証する。

本章が実際に考察対象としたのは、2011年6月現在、国立国会図書館の雑誌記事索引のタイトル検索で、検索語「ジェンダー」によりヒットした記事約4,500件の題目、および、2011年7月から9月にかけて収集できた記事本体、約2,000件である。記事本体、約2,000件はASCIIテキスト・ファイルのデータ量にすると約41.8MBであり、このデータ量は〈新潮文庫の100冊〉CD-ROM版（1995年）の本文のデータ量にほぼ匹敵し、ジェームス一世欽定英語版聖書に換算すると約7冊分にあたる。本稿ではこれを〈ジェンダー資料体〉と呼び、その言論総体を〈ジェンダー言論〉と呼ぶ¹⁾。

本章が主に分析に用いる方法はテキスト・マイニングである。テキスト・マイニングとは、一言で言えば、テキスト内において諸語句が出現する頻度（出現頻度）と、複数の語句が共起する頻度（共起頻度）を計測することによって、有意味な知見を得る研究諸手法の総称である。本章ではジェンダーを主題とした定期刊行物記事における諸語句の出現頻度、およびそれら諸語句のあいだの共起頻度を計測することで、ジェンダーという語句の諸意味や、そのクロノジカルな変化を解明する²⁾。

テキスト・マイニングの利点として大きいのは次の3点である。第1に、処理可能な情報量が、通常の間接的（読む）作業と比べて桁違いに多く、処理速度も早い。何せ〈ジェンダー資料体〉は文庫本小説100冊分の情報量を有するのだ。3年と定められた本研究期間内にそのすべてを文字通りの意味で読み、「ジェンダー」と深い関係を有する諸語句を拾い上げ、その全容を描き出すのは不可能である。しかしテキスト・マイニングのソフトを用いるならば、対象とする資料体さえ準備できていれば、比較的短時間で語句の出現頻度と共起頻度を正確に計測できる。

第2に、資料体およびソフトを複数の研究者が共有すれば、知見を得るまでのプロセスを完全に再現でき、得られた知見の妥当性をかなり厳密に検証できる。これまで社会科学におけるいわゆる質的研究は、いわゆる量的研究におけるような信頼性の高い妥当性検証の手段を持たなかった。もちろん質的研究には、検証可能性をあえて重視しないことによって得られる有意味な知見も多くある。しかし主たる研究対象がアクセシビリティの高い文字資料である場合——つまり一次資料をゼロから作成するようなタイプの研究や、対象が文字資料でない研究を除いて——は、原理的にはテキスト・マイニングの手法でかなり高いレベルの妥当性検証が可能である。

第3に、常識や定説を、証拠をあげながら批判し、より妥当性の高い知見を得るための発見的手段となり得る。その威力をよく示す一例として左古（2010）がある。これによれば、こんにち〈社会契約論者〉の最初期の一人と目され、高等学校における公民科目『倫理』の教科書にもそう紹介されているトマス・ホッブズは、その主著『リヴァイアサン』

（1651年）において、“social contract”やそれに類する語句を、じつは一度も用いていない。テキスト・マイニングによって分析してみると、ホッブズが契約によって成立すると述べているのは主権（sovereign）であることが判明する。とうぜんこのような常識批判の試みがどの程度の妥当性を有するかも、テキスト・マイニングによって検証可能である。

1 〈ジェンダー言論〉全体にみられる諸特徴

まず、1980年代から2010年までのあいだ、日本の定期刊行物においてジェンダーが論じられる際に、主にどのような語句が用いられてきたかを概観しよう。【リスト1】(本稿の末尾に掲載)は、出現頻度が高い語句を年次毎に第1位から第100位までリストしている³⁾。

まず出現頻度上位で目につくのは、もちろん性別を指す「女性」と「男性」の多さであろう。20年以上に渡って頻出語句の第1位は「女性」によって完璧に独占されており、「男性」も第5位までには必ず入っている。つまり〈ジェンダー言論〉は「男性」と「女性」に深くかかわり、かつ「男性」よりも「女性」に比較的深くかかわっている。

ジェンダーが「男性」と「女性」、特に「女性」にかかわることは、あるいは指摘するまでもない自明事と思われるかもしれない。しかしジェンダーの英語における来歴を顧みるとそうとも言えないのである。言語学の術語だったジェンダーを人間の性現象の解釈に転用したのは、20世紀半ばジョン・マネーだった。その時ジェンダーは生物学的・生理学的に「男性」であるか「女性」であるか判明でない人々(その多くはペニスなのかクリトリスなのか判然としないファロスを有する人々)が習得できる、あるいは習得すべき社会的・文化的に判明な「男性」らしさあるいは「女性」らしさ(その多くは〈小さすぎるペニスを有する男性〉としてではなく、〈大きすぎるクリトリスを有する女性〉として、「女性」らしく生きることを強く期待された)を意味していたのである。こんにちのジェンダーは言わば逆で、社会的・文化的な「男性」らしさや「女性」らしさ、なかでも専ら「女性」らしさの判明性に対して疑義を提起し、その再考を促すための語句となっている⁴⁾。

「男性」、「女性」に準じて恒常的に頻出するのは「問題」である。「問題」はほとんどの年次で出現頻度第5位以内に入っており、最も順位が低い1993年でも第14位に入っている。〈ジェンダー言論〉においては、何らかの「問題」、克服されるべき立場や意見の対立や不一致、調停されるべき不利益や損害が指摘され、その改善や解決の必要が主張される傾向にあることがわかる。

「問題」の次に頻出しているのは「家」、「妻」、「家庭」、「夫」、「子」など、《家族》というカテゴリーで括ることができる語句群である。〈ジェンダー言論〉が、男性と女性の生殖ペアから形成される人間関係にきわめて強い関心を有していることがわかる。

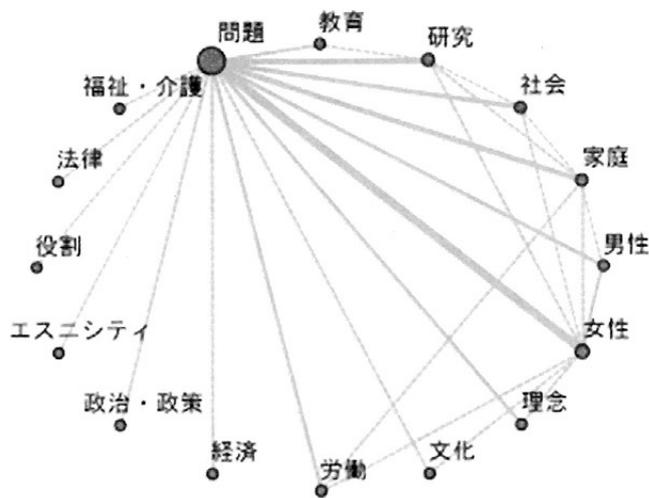
《家族》ほどではないものの、《教育》のカテゴリーに入る語句(「教育」とその類語「学校」、「学生」、「教科書」、「就学」など)、および《労働》のカテゴリーに入る語句(「労働」とその類語「職場」、「仕事」、「職業」など)も出現頻度上位にコンスタントに登場する。《労働》は、生活の糧を得るための活動における人間関係と解することができるだろう。《教育》は、教える／学ぶ人間関係、特に学校における人間関係と解することができるだろう。これらのほか人間関係の様式を示す他の語句としては「エスニシティ」が出現してはいるが、頻度はやや低く、年次によるばらつきも大きい。またこれら以外に、ある程度の様式性を有する人間関係としては友人関係や近隣関係などがあるものと想像できるが、それらを示唆するような語句はランキング上位をみるかぎりでは確認できない。

以上をまとめるには、《問題》(「問題」およびその類語「問い」、「課題」、「論争」などを内包するカテゴリー)を中心にして、《女性》、《家族》、《教育》、《労働》の関係を見るとよい。

(ジェンダー言論)全体における頻出語句を中心に16カテゴリーを編成する⁵⁾。【図1】

は《問題》が他の 15 カテゴリーとのあいだにもつ共起関係を示す。

マルの大きさは出現頻度、2つのマルのあいだを結ぶ線の太さは共起頻度をあらわす。すべてを図示すると読み取りが難しくなるので、ここでは 230 回以上の出現および共起のみを抽出している。《問題》とのあいだに共起頻度が最も高い 8 カテゴリーは、



【図 1】

《女性》, 《研究》, 《家庭》, 《社会》, 《労働》, 《男性》, 《理念》, 《教育》であり、なかでも図の右下側でダイヤモンド型を成している最上位 6 カテゴリーは互いにきわめて緊密な関係を有している。〈ジェンダー言論〉が主に《家庭》, 《労働》, 《教育》における《女性》(および《男性》)の《問題》を《研究》することに強い関心を有していることがはっきりと確認できる。

ここから更にもう一步《問題》の内容に分け入ろうとするとき、重要なのは《役割》である。《役割》と《問題》が共起するすべての文 512 件を抽出してみる。【表 1】はその 512 件の文における各カテゴリーの出現頻度を示している。512 件のうち半数以上に、《家庭》(139 件), 《労働》(99 件), 《教育》(52 件)のいずれかが含まれていることがわかる。大変高い確率であるから、《問題》《役割》と、《家庭》, 《労働》, 《教育》にはかなり特別な関係があるものと考えられる。

そこで【リスト 2】におけるように、《家庭》《役割》《問題》の関係、《労働》《役割》《問題》の関係、《学校》《役割》《問題》の関係をそれぞれ端的に説明している文を抽出してみる。

すると次の 3 つのことが分かる。

《家庭役割問題》が述べられている。これは、家事、育児、老親介護など、家庭において女性に付与されて当然とみなされている《役割》が、女性たち自身の望みにそぐわないかたちに固定されていることが問題だというものである。

《労働役割問題》が述べられている。これは《家庭役割問題》と表裏一体で、女性が賃労働しようとするとき、家庭における《役割》が軽減されないため、正規・非正規といった雇用形態、給与水準や昇進機会、休暇取得などにおいて不利な扱いを受けることが問題だというものである。

《学校役割問題》が述べられている。これは、上の二関係が反復したり変化したりする

【表 1】

女性	220
家庭	139
研究	127
社会	102
労働	99
男性	84
教育	52
理念	38
文化	29
政治	25
福祉	23
経済	21
法律	13
エスニシティ	7

ことにとって重要な位置にあって、学校は、家庭や労働にみられる女性の《役割》の《問題》を強化する機能を持つこともあれば、そうした《問題》の緩和を進めるために活用することもできるというものである。

【リスト2】

<p>《家庭》</p> <ul style="list-style-type: none"> ■…女子差別撤廃条約…は、…「出産における女子の役割が差別の根拠となるべきではなく、子の養育には男女及び社会全体が共に責任を負うこと」、「社会及び家庭における男子の伝統的役割を女子の役割とともに変更すること」の必要を明記した。 ■…女性差別を世界全体の構造的問題の一環として捉え、性差別をなくすためには男女の家庭と社会における伝統的性別役割分業それ自体の変更を必要とする…。 ■…伝統的な性別役割分業(男性は生産的役割,女性は再生産的役割を担うものとする考え)そのものを疑問視することがなく,そのため,育児をはじめとする家族の問題を女性の問題として見なしてしまう…。 <p>《労働》</p> <ul style="list-style-type: none"> ■…男女両性が等しく再生産労働(家事・育児労働)に携わることができるような生産労働を求める、という今日的課題を追求するとき、性別分業を支えた母性主義イデオロギーもまた克服されなければならない。 ■…ジェンダーの視点から性別分業を問うとは、男性を中心に構築された労働から女性がいかに差異化され排除されているかを問うことにほかならない。 ■…女性労働者がかかえる独自の問題、とりわけ家事・育児役割を担う女性労働者の問題を明らかにするとともに、それにとどまらず、労働市場のなかで女性労働者が果たす役割を、低賃金労働者あるいは不熟練労働者として分析してきた…。 <p>《学校》</p> <ul style="list-style-type: none"> ■…女性問題を、人権侵害(公権力による人権 ■…「家庭役割」と「母親役割」の強調は、「女子に対する教育の機会は、男子と均等でなければならぬか、その教育内容においては女子の特性に応じた教育的配慮も必要である」26)「それぞれの特性に差異があることを認めながら、共にその可能性を発揮できることは今後の重要な課題である」27)というように、性別役割分業の上に立つ女子の特性に基づく教育…の必要として主張されていく。 ■家庭科のように、民間の教師の側が要求して…「教育のすべての段階およびあらゆる形態における男女の役割についての定型化された概念の撤廃」に照らし、「ジェンダーに敏感な視点の定着と深化」に配慮した教科書点検や教材の開発をすすめてきているが、…小・中学校の検定教科書のジェンダー・バイアスは完全には払拭されていないなど 3)、問題の根は深い。
--

※コーパスの性質により、文中には濁点の脱落や無意味な文字の混入がある。

2 フェミニズムとの異同

本節では前節に素描した〈ジェンダー言論〉全体の要約に若干の肉付けをおこなうために、《フェミニズム》(「フェミニズム」とその類語「フェミニスト」、「女性学」などを内包するカテゴリー)という比較指標を導入しよう。〈ジェンダー言論〉と《フェミニズム》の相違は、内部者にとっては自明かもしれないが、外から見ると分かりにくい。しかもここで比較指標とするのは〈ジェンダー言論〉内における《フェミニズム》だから、両者は相似するのが当然である。そうであるだけに、〈ジェンダー言論〉と《フェミニズム》のあいだに相違を検出できれば、それは両者の特徴を適切に浮き彫りにするはずだ(本稿末尾の【リスト1】の右端を参照)。

ここでは〈ジェンダー言論〉全体における主要頻出語句の共起パターンと、《フェミニズム》におけるそれを比較する。【表2】の右側は、〈ジェンダー言論〉における頻出語句とその類語を16カテゴリーにまとめ、その出現率を頻度順にリストしている。【表2】の左側は、〈ジェンダー言論〉から《フェミニズム》を含む文をすべて抽出したうえで、それらの文中における同16カテゴリーの出現率を頻度順にリストしている。

両者を比較してまず気づくのは、《女性》《研究》《問題》という、〈ジェンダー言論〉でも最頻出の3カテゴリーが、《フェミニズム》においても同等の重要性を有していることで

あろう。これに準じて《社会》《文化》《政治》《理念》《役割》《教育》《エスニシティ》《法》についても、両者のあいだの出現率の乖離は2倍以内に収まっている。

しかしかなり相違する要素もある。【表2】のなかで両者のあいだで出現率の乖離が大きいカテゴリーを列挙すると、《家庭》(ジェンダー: 22.1, フェミニズム: 6.9)、《労働》(ジ: 11.1, フ: 4.4)、《福祉》(ジ: 3.2, フ: 1.1)、《男性》(ジ: 13.2, フ: 6.6)、《経済》(ジ: 5.4, フ: 2.7)である。

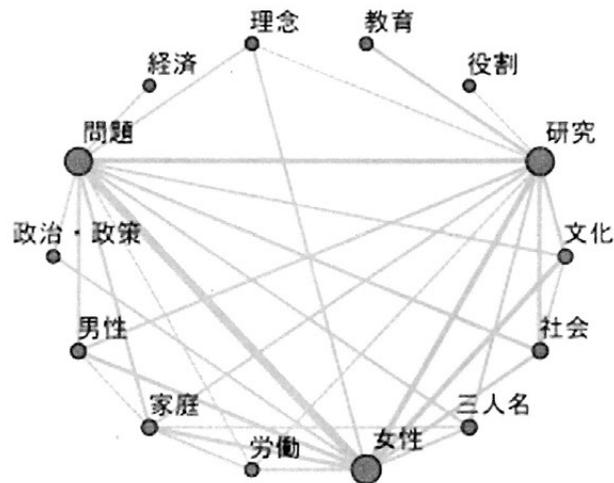
ここから浮上する〈ジェンダー言論〉の特徴は次のようなことである。まず《女性》の《問題》を《研究》するというのが、〈ジェンダー言論〉と《フェミニズム》に共通する大きな特徴である。第2に、〈ジェンダー言論〉は、《男性》よりも比較的《女性》を重視しているが、その程度は《フェミニズム》ほどではない。第3に、〈ジェンダー言論〉は《問題》が生起する場面として《家庭》と《労働》を重視する傾向が《フェミニズム》よりも強い。

では《フェミニズム》においては《家庭》と《労働》の代わりに何が重視されているのだろうか。再び【リスト1】の右端を確認すると、22位から90位までに「マルクス」、「パトラー」、「上野千鶴子」という人名が挙がっていることに気づく。これらを合計すると313件であり、《教育》(213件)と《労働》(233件)を上回って、驚くなかれ《家庭》(359件)に迫る。こうしたことは〈ジェンダー言論〉でも個々の年次(2000年、2005年など)においてなら起こっているのだが、30年間の全体でおしなべてしまうと、固有名詞は一般名詞に圧倒され、その有意味性は限りなく薄まる。

【図2】は《フェミニズム》における《問題》が、他の諸カテゴリーとのあいだに有する共起関係を

【表2】

	フェミニズム	ジェンダー
エスニシティ	1.4	2.4
労働	4.4	11.1
問題	22.4	20.5
女性	24.7	30.3
家庭	6.9	22.1
役割	2.4	3.9
政治	4.3	3.6
教育	3.9	7.7
文化	5.7	4.4
法律	1.5	1.8
男性	6.6	13.2
研究	23.1	16.9
社会	7.0	10.2
福祉	1.1	3.2
経済	2.7	5.4
自由	4.6	6.0
計	122.8	162.8

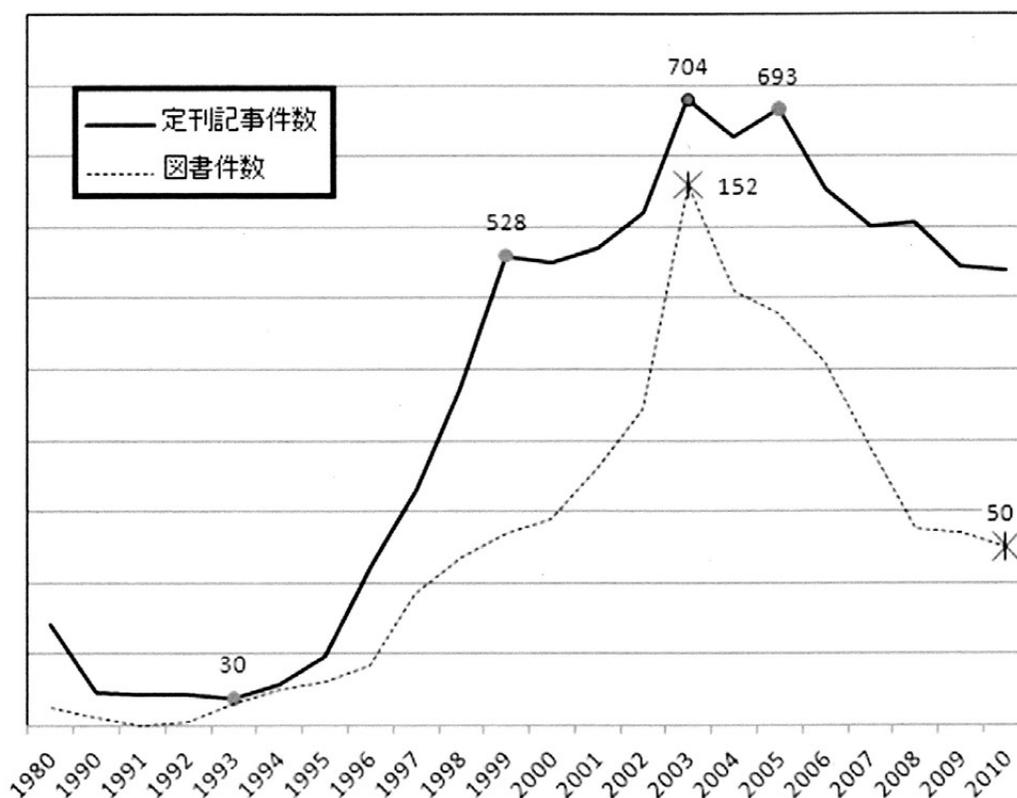


【図2】

表現している。読み取りを容易にするため 20 回以上の出現および共起のみを図示した。図のなかの《三人名》とは「マルクス」、「バトラー」、「上野千鶴子」の合計である。《女性》、《問題》、《研究》によって形作られる三角形を、主要諸カテゴリーが取り巻いている。そのなかで《三人名》は《家庭》、《労働》に匹敵する位置にあり、《教育》よりも重要性が高い。逆から言うと、〈ジェンダー言論〉は《フェミニズム》に比して特定少数の発言者から受ける影響が小さい。

3 経時的な変化：記事が掲載された媒体のジャンルからみた

〈ジェンダー言論〉の経時的な変化を究明するには、ジェンダーという語句を表題に含む記事の件数の変化を追跡することから始めるとよい。【グラフ 1】によると、〈ジェンダー言論〉の量は 1994 年までほぼ横ばいだったが、1995 年から 99 年までのあいだに激増している。その後は減速しつつも増加を続け、2003 年から 2005 年にかけてピークを迎える。2006 年以降は緩やかに減少してゆく傾向にある。



【グラフ 1】

この結果はおおむね井上の知見と一致すると言えるだろう。同じ時期の図書の動向をみるとほぼ同様の動きをしている。ただし図書のほうが 90 年代後半における増加速度がやや緩慢であり、2003 年にピークを迎えた後の減少がやや急激であるとも言えるかもしれない。

【表 3】は、ジェンダーという語句を表題に含む記事が、主に何をテーマとした媒体に掲載されたのかを示している。期間を通して記事件数が多いのは〈教育〉(437 件)、〈国際〉

(344件)、〈論壇・思想〉(305件)、〈人権〉(227件)、〈社会運動〉(224件)、〈労働〉(214件)、〈文芸〉(183件)である⁶⁾。

【表3】

	1980s	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
教育	0	0	2	0	3	0	1	13	22	54	40
国際	0	1	1	1	0	1	1	0	5	15	26
論壇思想	0	1	1	1	2	1	9	8	5	19	35
運動	2	0	0	0	0	0	0	0	4	6	10
労働	1	0	1	0	0	4	7	0	6	17	11
文芸	0	1	1	0	1	2	5	21	26	16	8
報道	6	1	0	0	0	0	0	0	0	7	12
地理	3	6	9	11	0	1	1	0	0	2	2

	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
教育	23	40	19	21	36	32	20	27	25	28	18
国際	6	33	45	29	30	25	14	23	30	43	12
論壇思想	42	5	14	51	12	42	26	17	4	4	5
運動	28	7	47	8	19	33	0	17	20	6	15
労働	7	33	19	13	41	11	7	5	9	13	7
文芸	12	13	5	6	7	31	4	8	7	2	6
報道	2	3	1	11	10	13	9	11	11	1	2
地理	1	1	7	3	6	1	2	0	0	2	3

経時的にみると、以下の5つの局面があったことがわかる。まず、他の諸ジャンルに先駆けて1980年代から「ジェンダー」を取り上げていたのは〈報道〉ジャンルの定期刊行物である。その内容は1984年『エコノミスト』（毎日新聞社）の「セックスとジェンダーの商品化を考える——サービス労働にみる性的要素の解明」、および1987年『朝日ジャーナル』（朝日新聞社）の4件の記事「〈過剰〉と〈排除〉——性別不快症候群が語る「性的なるもの」の現在」、「迷宮の女から、男として光の世界へ——私は性転換手術のためNYにやってきた（変性症者の手記）」、「大江戸曼陀羅 22 クロス・ジェンダーの文化」、「さまよえるジェンダー——日々筋骨が発達していくのを感じずる喜び——私は乳房除去手術を終えてNYから帰ってきた（変性症者の手記）」である。日本の言論における「ジェンダー」導入の最初期には性別違和、つまりこんにちなら性同一性障害、トランスセクシュアル、トランスジェンダーなどと呼ばれるだろう諸現象への関心、および性的なるものの認知をめぐる文化的、歴史的な多様性への関心があったことがわかる。

第2の局面は1990-92年の〈地理〉ジャンルの定期刊行物における「ジェンダー」の安定した頻出である。これは100パーセント、月刊『地理』（古今書院）が「エスニシティ・ジェンダー」と題したリレー・エッセイのコーナーを定例化したことに起因している。こ

のコーナーの題目においてエスニシティとジェンダーがナカグロで結ばれているのは、こんにちの社会科学的研究にみられるようにエスニシティとジェンダーに深い関係があることを示すのではなく、当時新たに重要な課題となりつつあったエスニシティあるいはジェンダーの、両方ではなくいずれかに関わる情報を読者に提供することがこのコーナーの主眼であったことを示している。そして各記事のタイトルから見ると、1990-92年に出現する26件の記事のうち確実にジェンダーを主題としていると言えるのは「女性がない日本の地理学界」（1990年）、「ジェンダーと女性問題のあいだから」（1991年）、『男性優位』の地理学に必要な女性の視点」（1991年）、「日本の労働市場とジェンダー」（1992年）、「再論・女性の視点」（1992年）、「第三世界の開発と女性をめぐって」（1992年）、「男性の視点は可能か?」（1992年）という7件にすぎない。しかしそれでも〈地理〉が他ジャンルに先駆けて「ジェンダー」への言及を早くから制度化していたことは確認されてよいだろう。

第3の局面は、1990年代後半における「ジェンダー」の爆発的増大である。これに最も貢献したのは〈教育〉ジャンルであり、それに次いだのは〈論壇・思想〉と〈文芸〉である。〈教育〉の貢献の大部分は、この時期に各誌が組んだ特集によるものである。1995年の第4回世界女性会議と1997年の雇均法改正に連動して多くの特集が生まれ、また「ジェンダー・フリー」という語句を用いて多くの特集が組まれた。『日本の教育史学』1995年「シンポジウム:教育史における女性——ジェンダーの視点から教育史を問い直す」（記事5件）、『教育社会学研究』1997年「教育におけるジェンダー」（記事5件）、『教育ジャーナル』1997年「ジェンダー・フリーで学校は変わるか」（記事3件）、『教育評論』1998年「社会を変える 教育を変える ジェンダー・フリーという視点」（記事7件）、『国立婦人教育会館研究紀要』1998年「ジェンダーからみた家族」（記事16件）、『人間と教育』1998年「ジェンダーから教育を問う」（記事8件）、『人材教育』1998年「入門セクシャル・ハラスメント ジェンダー・ハラスメント」（記事8件）、『月刊社会教育』1999年「ジェンダーの視点で考える」（記事6件）、『教育学年報』1999年「ジェンダーと教育」（記事12件）、『教育と医学』2000年「ジェンダーと現代社会」（記事10件）などがそれである。

なお〈教育〉ジャンルの媒体に掲載された記事は1998年に最多の54件を記録して以降は、毎年おおむね30件プラスマイナス10件程度で推移している。また〈教育〉の記事件数は〈ジェンダー言論〉全体が最も量的に大きくなっていった2002-05年に、他の主要ジャンルとは異なり顕著な増大を見せなかった。ただし、それでも他の主要ジャンルと比して件数が少なくなったわけではない。

1990年代後半における「ジェンダー」の爆発的増大に対する〈論壇・思想〉ジャンルの貢献は「セックス」および「セクシュアリティ」に関して組まれた幾つかの特集によるところが大きい。『現代思想』1997年「『女』とは誰か」（記事2件）、『現代思想』1997年「レズビアン/ゲイ・スタディーズ」（記事1件）、『思想』1998年「ジェンダー/セクシュアリティ」（記事10件）、『現代思想』2000年「ジュディス・バトラー——ジェンダー・トラブル以降」（記事14件）などがそれにあたる。〈文芸〉ジャンルの貢献は、性別役割の文化相対性の観点から既存の文芸作品を再解釈する試みに起因するところが大きいようだ。『日本近代文学』1996年「ジェンダーを考える」（10件）、『社会文学』1997年「ジェンダーの探求」（記事19件）、『日本文学』1998年「文学のジェンダー構成」（記事7件）は、いず

れもそのような主旨で編まれた特集である。

そして第4の局面は〈ジェンダー言論〉が量的に最大となった2002-05年である。ここでは〈国際〉と〈論壇・思想〉、次いで〈教育〉と〈運動〉の貢献が大きかった。この時期〈国際〉が最も件数を伸ばしたこと、そして〈報道〉はこの局面に至っても件数を見る限りでは主要な諸ジャンルに及ばなかったことが意外かもしれない。

この局面における〈国際〉の増大には『アジア女性研究』（公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラム）がたいへん大きく寄与している。2002年「ジェンダーと健康」（記事10件）、2002年「第12回アジア女性会議 北九州 自分らしく健康に生きる ジェンダーを超えて」（記事5件）、2003年「持続可能な開発 ジェンダーの視点から」（記事17件）、2005年「人間の安全保障とジェンダー」（記事6件）と、ほとんど毎年ジェンダーにかかわる特集を組み、しかも各特集の主旨に適合した多くの寄稿を獲得することに成功している。〈女〉という性別を同じくする人々が、言語や慣習、国籍や信仰の異なりにもかかわらず、よりよい暮らしの実現という目標を共有しようとする有様が見て取れる。なお〈国際〉はその後、〈ジェンダー言論〉全体が量的に減少してゆく過程のなかでも、毎年30件プラスマイナス15件程度で推移しており、直近では2009年に第2のピーク（43件）を記録している。

2002-05年における〈論壇・思想〉では『世界思想』（国際勝共連合）、『明日への選択』（日本政策研究センター）、『正論』（産経新聞社）の寄与が大きい。『世界思想』は2002年に「ジェンダーフリーという害毒」（記事4件）、2003年に「21世紀の共産主義——ジェンダーフリーの危険な正体を暴く」（記事2件）と題して特集を組んでいる。『明日への選択』は特集という形態ではないものの「ジェンダーフリー」をタイトルに冠した記事を2002年に2件、2003年に6件掲載している。「こんなに危ういジェンダーフリー教育」（2002年）、「ジェンダーフリー革命の現実を直視せよ」（2002年）、「『日本解体』を狙う ジェンダー・フリーの『本当の恐ろしさ』」（2003年）、「脳科学が立証するジェンダーフリーの『ウソ』」（2003年）、「『男女共同参画』に隠されたジェンダーフリーの企み」（2003年）、「ジェンダーフリー革命への四つの『仕掛け』」（2003年）、「ジェンダーフリー教育の恐るべき『弊害』」（2003年）、「過激な『性教育』もルーツは同じ 教育を蝕むジェンダーフリーの『毒』」（2003年）。

『正論』はこれらに少し遅れて「ジェンダーフリー」をタイトルに冠した記事を2003年に3件、2004年に2件、2005年に5件掲載している。「『両性具有への人間改造』——ジェンダー・フリー教育の正体」（2003年）、「ジェンダーフリー教育への危惧」（2003年）、「あの上野千鶴子女史も仰天！ 全国——ひどい三重県桑名市のジェンダー条例」（2003年）、「ジェンダーフリーの元祖はやっぱりマルクスとエンゲルス」（2004年）、「これは怖い！ 『教科書黒書』ジェンダーフリー版」（2004年）、「ある性医学者が行った恐るべき実験——嘘から始まったジェンダーフリー」（2005年）、「上野千鶴子女史が激賞したジェンダーフリー条例失効の顛末」（2005年）、「日教組のジェンダーフリー隠しと現場の暴走」（2005年）、「ジェンダーフリー隠しに手を貸す文科省」（2005年）、「猪口さん、ジェンダーフリー推進の旗を降ろして！」（2005年）。

これらに次いで2002-05年における寄与が大きいのは『世界』（岩波書店）の2005年の特集「ジェンダーフリーって何？」（記事5件）、『科学的社会主義』（社会主義協会）の2005

年の特集「ジェンダー平等と女性のいま——国際女性年から三十年」（記事5件）、そして『論座』（朝日新聞社）の2005年の特集「ジェンダーフリーたたきの深層」（記事4件）である。

2002-05年における〈論壇・思想〉ジャンルには、イデオロギー闘争の応酬が明瞭にあらわれている。2002年から2005年までが言わば右派の攻勢の時期であり、2005年にはそれに対する左派からの応戦があった。

そして最後の局面は、2006年以降の〈ジェンダー言論〉の量的減少である。この時期に〈論壇・思想〉、〈運動〉、〈労働〉、〈文芸〉は記事件数を半減させている——〈教育〉、〈国際〉、〈人権〉、〈報道〉、〈歴史〉、〈医療〉は記事件数を維持している——。

〈論壇・思想〉の激減（2002-05年の合計119件から06-09年の合計51件へ）は、2002-05年のあいだにイデオロギー闘争が一巡し、2006年以降に二巡目が生起しなかった、あるいは二巡目もあったものの、一巡目ほどの盛り上がりを見なかったことを物語っているとみてよからう。このことが〈ジェンダー言論〉の量的減少に最も寄与している。

それに次いで寄与度が大きいのは〈運動〉の減少（同107件から43件へ）であるが、これは『女性&運動』（新日本婦人の会）と『あごら』（あごら新宿）が「ジェンダー」をタイトルに冠した記事を減らしたことの影響が大きい。〈労働〉の減少（同84件から34件へ）は『女性労働研究』（女性労働問題研究会）と『世界の労働』（日本ILO協会）が「ジェンダー」をタイトルに冠した記事を減らしたことの影響が大きい。なお、この時期『女性と労働21』（フォーラム・「女性と労働21」）はほぼ横ばいであった。

〈文芸〉（同49件から21件へ）の落ち込みは見かけ上のことである。2005年に〈文芸〉が突出した件数の増大を見せたのは、『国文学：解釈と鑑賞』（至文堂）が同年に組んだ特集「ジェンダーで読む夏目漱石」（29件）があまりにも巨大だったためである。これを除去すれば〈文芸〉における記事件数は2000年代を通じてコンスタントである。〈法律〉の記事件数の推移はここで述べた5つの局面に連動していない。

以上を井上（2006）と照合しながらまとめれば次のことである。

まず井上によれば1980年代の日本の図書、行政資料においてジェンダーと言えはイリイチのヴァナキュラー・ジェンダーを意味した。これに対して本節の発見によれば定期刊行物の領域では1987年には性別違和がジェンダーの名の下で論じられていた。この事実、その記事本体の著者である2人の人物のうち1人、黒柳俊恭（もう1人は虎井まさ衛）が同年に『彷徨えるジェンダー——性別不快症候群のエスノグラフィー』（現代書館）と題した図書を刊行していたことと合わせて、ジェンダー研究の今後に少なからぬ示唆を与えられる。

1990年代前半は井上によれば、ジェンダーの観点から社会的・文化的諸事象を研究する学術の動向が出現した時期だった。これに対して本節によれば、定期刊行物におけるジェンダーは未だ〈新奇なもの〉の域を出ていなかった。ジェンダーに関する言論がはっきりと増大するのは1990年代半ば以降のことで、それは学術研究の内発的な発展というよりは、1995年の世界女性会議、1997年の雇均法改正という大きな出来事に刺激された結果だった。

井上によれば、1990年代後半の〈ジェンダー言論〉の急増には4つの要因があった。そのうち3つについては本節も同様の知見を提示した。第1の〈ジェンダー観点からの学術

研究の隆盛)は、本節の分析では特に〈文芸〉のジャンルではっきりと確認できた。第3の〈学校教育における男女平等からジェンダーフリーへの移行〉は、本節の〈教育〉ジャンルの考察が裏付けた。第4の〈性的少数者への抑圧に対する異議申し立て〉は〈論壇・思想〉ジャンルに看取できた。井上が指摘する第2の要因〈女性問題からジェンダー問題への政策のパラダイム転換〉については残念ながら本節では検証できなかった。

2000年代前半の図書と行政文書における〈ジェンダー言論〉の量的ピークは、井上によれば1990年代後半の動向の延長線上にもたらされた。これに対して本節によれば、1990年代後半の定期刊行物における〈ジェンダー言論〉の増大と2000年代前半におけるそれは性質が異なる。1990年代後半の増大は、雇均法とジェンダーフリーを旗印とした〈教育〉ジャンルの媒体群と、セクシュアリティを旗印とした〈論壇・思想〉ジャンルの媒体群が主導した。2000年代前半の増大は、開発と人間の安全保障を旗印とした〈国際〉ジャンルの媒体群と、左右に分かれたイデオロギー闘争の舞台となった〈論壇・思想〉ジャンルの媒体群が主導した。

このピークを経過して以降、2006年以降の〈ジェンダー言論〉の激減は、井上によれば〈バックラッシュの影響〉である。本節が示唆するところによると、この〈バックラッシュの影響〉には2種類が存在した。第1に〈右派からの攻撃に対して大方の議論が委縮した〉こと。これはこの時期における〈運動〉と〈労働〉のジャンルにおける激減によって傍証されるかもしれない。しかしそれだけではない。第2には〈論壇・思想〉にみられたように、この激減は、〈右派からの攻撃にたいして左派が反撃した後、右派からの再攻撃が弱かった〉ことの結果であった。

4 経時的な変化：内容からみた

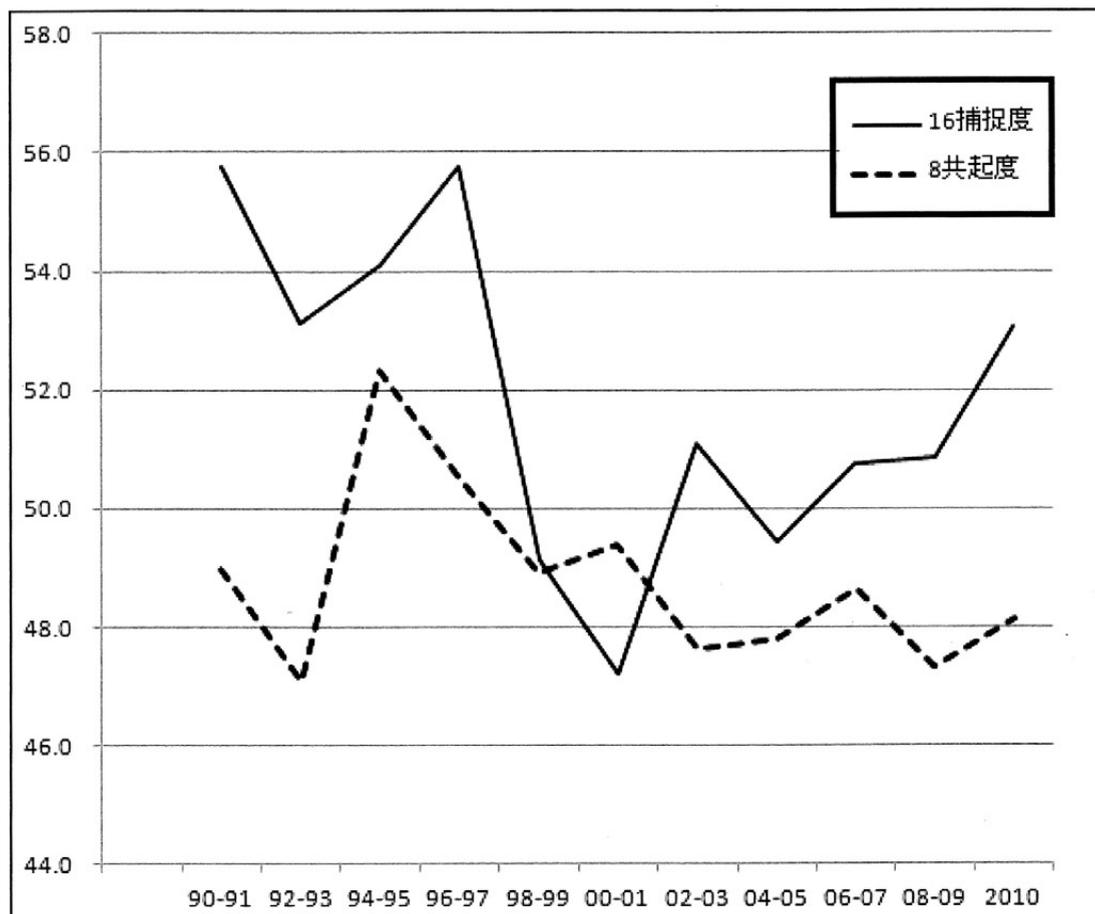
もう一步記事の内容に立ち入った変化を検討するために、主要16カテゴリーのうち、〈ジェンダー言論〉全体の要約において最重要の8カテゴリーを抽出し、その8カテゴリーが互いにどれくらい共起しているかを指標化しよう。

【グラフ2】における「16捕捉度」とは、〈ジェンダー言論〉全体のなかで、主要16カテゴリーのいずれかによって、どのくらいの割合の文を捕捉できたかをあらわしている。捕捉度が高いということは、資料体に出現する語彙が主要16カテゴリーに高い程度で収束していることを意味する。「16捕捉度」が低下してゆくということは、〈ジェンダー言論〉における語彙が多様化し拡散してゆくことを意味する⁷⁾。

「8共起度」とは、最重要8カテゴリーが一文中で互いにどれくらい共起しているかをあらわしている。「8共起度」が高いということは、複数のカテゴリーが緊密に関係していることを意味する。「8共起度」が低下してゆくということは、〈ジェンダー言論〉における最重要語句群の相互関係が弛緩してゆくことを意味する。

【グラフ2】における「16捕捉度」と「8共起度」は、世紀の変わり目までは総じて同じ動きをしていると言ってよさそうである。「16捕捉度」「8共起度」ともに90年代前半から90年代中頃にかけて上昇する。その後00年に向けて揃って下降する。しかし世紀の変わり目以降はやや異なる。「16捕捉度」は2010年まで緩やかに向上する傾向にあるが、「8共起度」は横ばい、あるいは90年代半ばをピークとして緩やかに下降する傾向にある。

90年代前半から中頃にかけて、「16 捕捉度」と「8 共起度」がそろって上昇することは、その時期に、比較的限られた語彙が一定のパターンへと緊密に構造化されていったことを物語っている。つまり〈ジェンダー言論〉は90年代半ば、最も《家庭》、《労働》、《教育》における《女性》の《役割》をめぐる諸《問題》を《研究》する言論として強固に構造化されていたことがわかる。



【グラフ 2】

90年代後半から世紀の変わり目にかけて「16 捕捉度」、「8 共起度」がそろって下降することは、井上説に則って解釈すると、ジェンダーという語句が普及し、適用範囲を拡大した結果としての拡散ということになるだろう。

それ以外の要因は指摘できないだろうか。そこで、改めて【リスト 1】を 1998 年から 2001 年の範囲で精査してみる。主要 16 カテゴリーに入らない語彙のなかで何か起こっていないだろうか。すると 2 つの特徴に気づく。第 1 に、98 年から 00 年にかけて、他ではあまり出現頻度上位にあがってこない人名がある。特に「バトラー」と「イリガライ」である。これと相関してのことだろう、同時に「セクシュアリティ」の瞬間的な増大が見られる。「セクシュアリティ」は 99 年に 75 位、00 年に 98 位、01 年に 48 位に入ったが、02 年以降はふたたび 100 位以内から姿を消している。

第 2 に、この時期には「暴力」が重要な関心事として浮上している。この語彙は 1999 年まで頻出 100 位以内に入っていなかったのだが、2000 年に突然、第 16 位に登場している。

この年の第 53 位には「セクシュアルハラスメント」も入っている。「暴力」はそれ以降も、かなりコンスタントに頻出する語彙となっている (01 年 64 位, 02 年 100 位, 03 年 24 位, 06 年 31 位, 10 年 70 位)。

第 1 点について。「16 捕捉度」, 「8 共起度」がそろって下降してゆくなかで, 1990 年代後半, ジュディス・バトラーとリュス・イリガライの名が「セクシュアリティ」とともに重要な関心事となっている。これは, 既存の〈ジェンダー言論〉の確立された語彙と構造化された語法に対して, その再考を促す動向だったと考えられる。

「バトラー」あるいは「イリガライ」が出現する 836 文をすべて抽出し概観すると, 「パフォーマティヴィティ」, 「パフォーマンス」, 「エージェンシー」という片仮名の専門用語が散見される。これらをまとめてカテゴリーにし, 《バトラー用語》と名付ける。全体の頻出語句ランキングに位置づけると《バトラー用語》は 66 件であり, 「問題」(81 件), 「主体」(78 件) に次いで, 驚いたことに出現頻度は第 3 位となる。

【リスト 3】

- 『ジェンダー・トラブル j(1990)のなかでジュディス・バトラーは, ジェンダーはパフォーマティヴであるという議論を展開した・・・
- 「ジェンダー・アイデンティティは, ジェンダーの表現に先立つものではない」とするジュディス・バトラーは, それが, 「通常アイデンティティの帰結だと言われるところの『表現』によってパフォーマティヴに構築される」ことを説く(2)。
- バトラーは, わたしたちは自分のジェンダー・アイデンティティを行為/演技することを学ぶということ, すなわちジェンダー・アイデンティティを行為遂行的に構成されると論じる(17)。
- 『ジェンダー・トラブル』以降少しずつ修正しながら, しかし基本的に変っていないバトラーの視点があるとするれば, ジェンダーとセックスの旧来の因果関係を転倒させたこと, そして本来は起源でないものを起源と捏造するのがパフォーマティヴな発話行為であるという視点です。
- アーヴィング・ゴフマンの印象操作やパフォーマンス(演技)においては, 行為者の作為性, つまり演技しようとする意志の自覚性が強調されていたが, バトラーのパフォーマティヴィティは, 行為者よりも先に存在し, 行為者の意志や選択に還元できない。
- いったいこのントリックと, バトラー自身のパフォーマティヴィティ論, たえざる反復からなるずれの主張とは, どのように交差しているのか。
- そしてバトラーはこのような存在がひきおこす, ひとを疑問に付しつづける境乱行為を, 「パフォーマティヴ」な行為として定式化する。
- バトラーにおけるパフォーマティヴィティという概念は, 先に見たように, あらかじめ主体を想定するパフォーマンスとは違い, 主体という概念そのものに異議を唱えるものである。
- バトラーは, ジェンダーの実体的 1 効果が, ジェンダーの首尾一貫性を規定する実践によって, パフォーマティヴ(行為遂行的)に生み出され, 強要されているとし, ジェンダーとはパフォーマティヴであるとする。
- 一方, バトラーの主体・アイデンティティを説明する鍵概念は, パフォーマティヴィティである。
- 近年, フェミニズム・クィア理論において最も注目されるジュディス・バトラーの理論の白眉は, 主体の受動性を分析する理論に, 能動的なエージェンシー四び q 魯 o 箕行為体)の理論を接ぎ木したことである(-)。
- たとえばジュディス・バトラーの『ジェンダー・トラブル』では, 「男の子なんだから泣いちゃだめよ」とか, 「女の子なんだから暴れちゃだめよ」とかいうふうに, 言語によるパフォーマティヴな儀式的反復によって男らしい男とか女らしい女というものが生産・再生産されていくということが強調される。

※コーパスの性質により, 文中には濁点の脱落や無意味な文字の混入がある。

《バトラー用語》が出現する 66 件の文には, きわめて濃厚に既存の〈ジェンダー言論〉の再考を促すメッセージが含まれている。【リスト 3】はなかでも決定的な文を抽出している。

その内容を要約すれば, あらまし次のようである。既存の〈ジェンダー言論〉が想定している人間とは, 生殖する一対としての男性と女性である。しかし性別役割の再考を標榜するなら, 生殖に依存する性別の観念によって, 役割の文化的パターンを基礎づけるジェンダー概念を批判的に乗り越えるのが先決である。それをしないから, 〈ジェンダー言論〉は自ら批判しているはずの決定論的な性別観と, 性別と役割の二元論に, むしろ緊縛されている。今後〈ジェンダー言論〉にとって重要なのは, ほんらい多種多様なはずの人々の

おこないがどのようにして既存の性別役割のような思考・行動パターンへと収斂しているのかを検証することである。本研究が冒頭付近で指摘した 20 世紀半ばにおいてジェンダーという語句が有した意義と呼応する主張である。

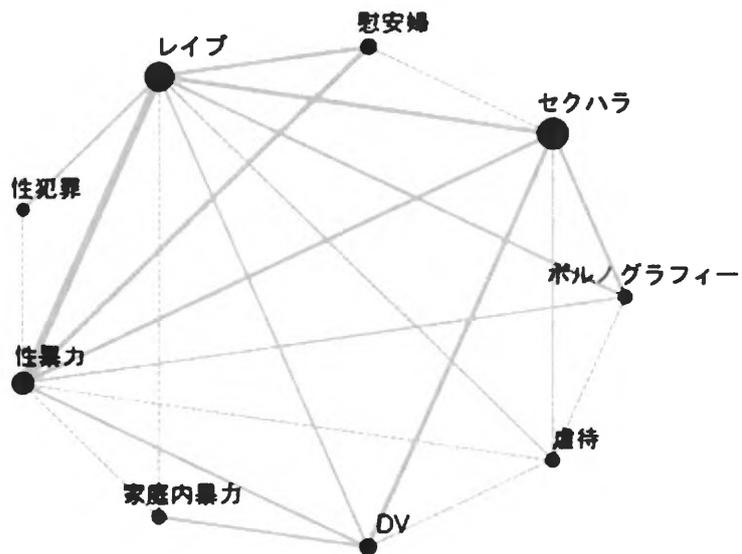
【グラフ 2】に見えたとおり 1990 年代後半から 2010 年まで一貫して「8 カテゴリー共起度」が下降し続けているのは、少なくとも部分的には、このバトラー的問題提起のインパクトが少しずつ受容されていっていることとして説明できるのではないか。その一方で、90 年代後半にいったん低落した「16 カテゴリー共起度」が 00 年代を通して再び持ち直す傾向にあるのは、〈ジェンダー言論〉を、既存の語彙を用いて改めて構造化することに向けた予兆ではないか。

第 2 点について。〈ジェンダー言論〉から改めて《暴力》（「暴力」およびその類語「被害」、「加害」、「レイプ」、「セクハラ」などからなるカテゴリー）を抽出した。その概要を示したのが【図 3】である。読み取りやすさを優先し、4 回以上の出現および共起のみを図示した。

《暴力》において突出して頻繁に言及されているのは《セクハラ》（「セクシュアルハラメント」、「性的いやがらせ」などからなるカテゴリー）（599 件）、《レイプ》（「レイプ」、「強姦」などからなるカテゴリー）（526 件）である。これらに次いで《性暴力》（「性的暴力」を含む）（333 件）があり、そして《DV》（「ドメスティックバイオレンス」などからなるカテゴリー）（175 件）、《慰安婦》（「従軍慰安婦」などからなるカテゴリー）（137 件）が続く。

《性暴力》は《レイプ》と最も頻繁に共起しており、かつ、他のすべてのカテゴリーとも共起している。したがって《性暴力》はこれら諸現象を統括するカテゴリーであると言える。かつて瑣末視されていた《セクハラ》や、警察行政の民事不介入原則によって等閑視されていた《DV》、そして本人の自由意志と公権力による強制が強い緊張関係に置かれる《慰安婦》を、1990 年代後半に、一挙に、はっきりと公共の議論の俎上に載せる機能を持ったのが《性暴力》であったと言える。

【表 4】は年次毎に各カテゴリーの出現回数を示している。《セクハラ》は 1990 年にいったん出現したもののすぐに消え、90 年代半ばに改めて提起され 2000 年にピークを迎える。《慰安婦》は 1995 年に初めて出現し、1997 年に 1 回目のピークを迎える。やや遅れて《DV》は 1998 年に初めて出現し 2003 年にピークを迎える。これらにちょうど連動して《性暴力》は 1995 年に初めて出現してから 2000 年に 1 回目のピーク 2003 年に 2 回目



【図 3】

のピークを迎えている。この事実は《性暴力》が包括的カテゴリーとして機能したことを傍証する。

【表 4】

	1980	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
DV	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	1
セクハラ	0	2	0	0	0	0	5	4	44	12	3
ポルノグラフィ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0
レイプ	0	1	0	0	0	0	11	33	29	39	128
家庭内暴力	0	0	0	0	0	0	0	2	1	5	3
性暴力	0	0	0	0	0	0	4	1	59	29	24
性犯罪	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	1
慰安婦	0	0	0	0	0	0	1	19	22	3	4
暴行	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
虐待	0	0	0	0	0	0	1	6	1	3	5
総数	0	3	0	0	0	0	22	67	156	101	172

	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
DV	9	27	22	24	12	7	9	1	3	4	0
セクハラ	252	10	9	1	8	3	7	0	2	0	1
ポルノグラフィ	0	0	0	6	7	0	0	0	0	0	0
レイプ	40	14	12	100	3	13	52	3	13	19	3
家庭内暴力	13	13	10	4	9	4	11	2	1	0	8
性暴力	43	15	14	72	0	4	39	7	5	11	8
性犯罪	1	2	2	10	0	4	10		2	4	0
慰安婦	19	8	7	5	0	0	7	2	1	45	1
暴行	1	3	3	3	0	2	11	0	0	0	0
虐待	21	7	5	8	27	1	7	1	1	3	5
総数	399	99	84	233	66	38	153	16	28	86	26

2000年代、《セクハラ》と《DV》が下降してゆくなかでも、《性暴力》は出現し続けた。2006年における《レイプ》の再上昇、2009年における《慰安婦》の再上昇とともに上昇することも、《性暴力》が包括的カテゴリーとしての機能を有していることを裏付けていると言えるだろう。

1990年代半ばに最も強固に完成された〈ジェンダー言論〉の構造は、2000年代をとおして弛緩し続けている。それとちょうど入れ替わりに 1990年代後半以降に言論を構造化する新たな要因が生じたとすれば、それはおそらく唯一《性暴力》であった。もちろん《性暴力》を中心とする言論構造は最重要8カテゴリーほどには強力でない。しかし《性暴力》は最重要8カテゴリーからはある程度自律しており、かつバトラー的な問題提起からもマイナスの影響を受けない。

5 まとめ：バックラッシュ？

以上、本稿は、約 30 年にわたる〈ジェンダー言論〉の全体像と、その変遷過程の概要をテキスト・マイニングの手法によって考察してきた。文中の下線部だけを読めばその結果が濃縮されているので、ここで改めてその内容を要約することはしない。ここでは本研究の知見が持ちうる意義について若干の水路付けをおこなう。

第 1 に、本研究の知見の主要部分はテキスト・マイニングのソフトを用いて、2 週間程度で導かれた。通常の〈読む〉作業をとおしてならば、この知見を獲得するのに週単位でも月単位でもなく、年単位の時間を要したはずである。もちろん実際にはほとんどの記事はあらかじめ電子化された形で存在したわけではなかったため、図書館等に向いて冊子から複写を取り、それを画像ファイルに変換し、画像ファイルから OCR ソフトを用いて ASCII テキストを作成し、それをもとにコーパスを作成するためには、計測不能な作業時間を要した。しかし計測不能な作業時間を要するのは通常の〈読む〉作業でも同じである。

第 2 に、ジェンダーにかんする過去約 30 年の言論は、それを担った個々の論者が同意しようとしまいと、総体としてはかなり明確に一貫した傾向を有していることが分かる。

〈ジェンダーとは何か〉について、有力者たちが大上段に振りかぶって下す定義から議論を始めると、論者たちのあいだの相違や対立点があるいは目につきやすくなるかもしれない。しかし予断を抱かず、あらゆる記事を平等に扱い、虚心坦懐に全体を見渡せば、相違点よりも共通点のほうがはるかに大きいことが分かる。要するに〈ジェンダー言論〉は家庭、労働、教育における女性の役割の問題を研究することに強い関心を有する言論、およびそのような言論に対して幾つかの角度から投げかけられる諸批判の言論——大きいのはバトラーとイリガライに代表される性別批判、そして勝共連合や産経新聞に代表されるイデオロギー論争——から成るのである。〈ジェンダー言論〉のこの構造は 1990 年代半ばにおける確立以降こんにちに至るまで緩やかに弛緩してゆく傾向にはあるが、それでも、これに取って代わるような新たな構造はまだ確認できない。

第 3 に、本稿がもたらした知見はきわめて高度な検証可能性を有する。このような知見、特に第 2 節におけるような知見は、ジェンダーの専門家にとっては口に出すまでもない、ひどく冗長な〈常識〉かもしれない。しかしその〈常識〉は〈その道何十年〉の経験から修得されたものであり、その修得プロセスは明確でない、あるいは明確であってもきわめて複雑かつ、内容が自明的であらためて言語化されることがないため検証可能性が低い。要するにこうした〈常識〉を検証可能な形で明確な言葉で述べることができるのは、テキスト・マイニングの欠点ではなく、利点なのである。検証不能な〈常識〉が専門家の秘儀によって権威づけられるのは、ジェンダーにかんする言論においては不健全であろう（ジェンダーだけでなく公共の言論全般にとって適切でない）。本研究が言語化したジェンダーの〈常識〉が現代の専門家に違和感なく受けとめられるとすれば、それは、現代の専門家がそうした不健全な状態に陥っていないことを示す証左である。

第 4 に、本研究の知見はジェンダーについて発言したいあらゆる人にとって実用的なガイドとなる。ジェンダーについて効果的に発言するには、〈ジェンダー言論〉における頻出語句をなるべく用いること、および、用いる際にはそれら諸語句のあいだの〈常識〉的な関係のあり方を踏まえるのが得策である。もちろん〈ジェンダー言論〉の〈常識〉を反復

せよというのではない。自身の発言を〈常識〉と関係づけながら組み立てることが肝要なのである。

第5に、本研究の知見は発見的な道具として有用である。ごく一例として、ジェンダーという語句を用いていなくとも、〈ジェンダー言論〉にとって重要な意義を有する言論を探知するために使えるだろう。ちょうどシモーヌ・ド・ボーヴォワールやジャーメイン・グリアーがジェンダーという語句をさほど用いなかったにもかかわらず〈ジェンダー言論〉に大きな影響を与えたように、ジェンダーを冠さないが〈ジェンダー言論〉にとって大きな意義を有する言論が、どこかに潜んでいる可能性があるのだ。

最後に、2003年前後の、いわゆるバックラッシュ現象について判断を下して本研究を閉じよう。井上説によれば、ジェンダー関連の図書と行政資料はバックラッシュ現象とともに量的に減少した。このこと自体は、定期刊行物においてもほぼ同様に起こっている。しかし、では、このことはそれ以上の意味を持ったのだろうか。つまり2003年以降、〈ジェンダー言論〉にはバックラッシュ現象の影響による実質的な内容の変化があったのだろうか。

すでに第3節【グラフ2】に示したが、端的に言って、それを示唆するような事実は確認できない。過去30年間の〈ジェンダー言論〉の内容における大局的な変化は、①1990年代半ばに向けた、主要16カテゴリーおよび最重要8カテゴリーによる強固な構造化、②90年代後半から00年代初頭における使用語彙の多様化、③90年代半ば以降、00年代全般における最重要8カテゴリーから成る構造の弛緩、④00年代全般における語彙の緩やかな再集約化なのである。どうやらこうした大局的な変化の傾向は2~3年程度の突発的な現象によって影響を受けるものではないようである。

【注】

- 1) 〈ジェンダー資料体〉の作成プロセスについて、詳しくは左古(2014b: 111-112)を参照。
- 2) 用いたソフトウェアについて、詳しくは左古(2014b: 113-114)を参照。
- 3) 頻出語彙ランキング表の作成について、詳細は左古(2014b: 114-115)を参照。
- 4) マネー以降1990年代に至る英語圏におけるジェンダー概念の変遷について、詳しくはGermon(2009=2012)を参照。
- 5) 本章では主要カテゴリーを16件として分析したのに対し、左古(2014b)では12件として分析した。その結果同様の知見が得られた。
- 6) 媒体のジャンル分けの方法について、詳しくは左古(2014b: 116-120)を参照。
- 7) 本章では16カテゴリーによる捕捉度と8カテゴリーによる共起度を計測したのに対し、左古(2014b)では12カテゴリーによる捕捉度と6カテゴリーによる共起度を計測した。その結果同様の知見が得られた。

【文献】

江原由美子・長谷川公一・山田昌弘・天木志保美・安川一・伊藤るり、1989、『ジェンダーの社会学——女たち／男たちの世界』新曜社。

Germon, Jennifer, 2009, *Gender: A Genealogy of an Idea*, New York: Palgrave Macmillan. (=2012, 左古輝人訳『ジェンダーの系譜学』法政大学出版局.)

- 井上輝子, 2006, 「『ジェンダー』『ジェンダーフリー』の使い方, 使われ方」若桑みどりほか編著『「ジェンダー」の危機を超える! 徹底討論! バックラッシュ』青弓社, 61-82.
- 黒柳俊恭, 1987, 『彷徨えるジェンダー——性別不快症候群のエスノグラフィー』現代書館.
- 左古輝人, 2010, 「社会の科学とテキスト・マイニング」『人文学報』422: 73-98.
- , 2014b, 「資料集 1980年代から2010年までの『ジェンダー』——日本の定期刊行物における」『人文学報』482: 111-132.
- 山本哲士編, 1983, 『シリーズ「プラグを抜く」 1 経済セックスとジェンダー』新評論.

【リスト1】ジェンダー言論における頻出語彙ランキング

	1980s	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000
1	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性
2	家族	男性	セール	男性	女	女	男性	男性	男性	男性	女	女
3	男性	研究	男性	私	男	男性	女	女性文化	問題	女	男性	問題
4	社会的	社会的	問題	彼女	生徒	問題	意味	社会的	意味	問題	問題	彼女
5	問題	女	紀子	問題	学校	主体	社会的	文化	女	子供	家族	男性
6	社会	福祉国家	女	彼	彼女	意味	問題	問題	彼女	男	私	存在
7	家父長制	社会	介護者	女王	男性	セックス	文化	家族	自分	男女	彼女	意味
8	家	問題	仕事	筆者	役割	存在	男	女	社会	彼女	男	自分
9	人々	役割	意味	研究	子供	生産	建築	男女	男女	社会	意味	主体
10	研究	意味	男	我々	男女	学生	関係	意味	社会的	意味	自分	バトラー
11	意味	女子校	社会的	視点	身体	ボストン大学	彼女	社会	関係	関係	社会的	言葉
12	男女	彼女	存在	状況	社会的	フェミニズム	社会	性	男	自分	存在	関係
13	存在	男	結婚	存在	女子	私	家族	研究	存在	社会的	家	社会的
14	女	関係	人々	人々	問題	妻	存在	フェミニズム	妻	家族	フェミニズム	私
15	私	視点	私	自分	存在	身体	私	夫	夫	存在	社会	議論
16	概念	男女	差別	ヴィクトリア	社会	家事労働	女性文化	役割	子供	教育	関係	暴力
17	日本	電子メディア	家族	日本	性役割観	文化的	彼	ジンメル	家族	家庭	子供	意識
18	文化	結果	自分	社会	私たち	大学	主張	彼女	私	役割	研究	夫
19	関係	女性性	社会	言葉	b高校	労働	男女	妻	研究	視点	日本	私たち
20	ジンメル	市民権	都市	意味	a高校	男女	文化的	日本	日本	家	言葉	男
21	役割	意識	記事	差別	視点	大学教育	結果	男	指摘	研究	分析	研究
22	経済的	立場	天皇	運動	意味	政治的	子供	主張	役割	変化	現在	社会
23	有賀	存在	パート	彼ら	進路	彼女	日本	家庭	人々	女子	議論	役割
24	フェミニズム	本	日本	ジェンダー	自分	教育	概念	関係	家	結果	指摘	フェミニズム
25	妻	教育	役割	子供	トラック	結果	役割	活動	文化	彼	役割	行為
26	家庭	共学	地理学	主張	関係	構築	研究	意識	分析	世界	彼	妻
27	喜多野	文化	国民	立場	フェミニスト	男	コーラ	関連	重要	状況	重要	概念
28	立場	議論	嫁	在日朝鮮人	家庭	自然	重要	視点	身体	指摘	私たち	子供
29	男	社会学	夫	国	精神病	研究	自分	概念	平等	運動	状況	日本
30	規定	概念	介護	調査	形成	日本	家庭	経済的	対象	生活	家庭	彼
31	夫	教科書	子供	男	グループ	共学制	差異	結果	自由	仕事	人々	教育
32	歴史的	参照	現在	役割	病	関係	人間	存在	権利	対象	変化	結果
33	教育	政治的	研究	婦人	仕事	夫	言葉	現在	主張	人々	妻	対象
34	生産	過程	意識	議論	経験	表象	分析	メディア	結果	夫	歴史	家族
35	主張	サブカルチャー	教育	事実	人間	構成	立場	生活	判決	影響	概念	分析
36	価値	経済的	比率	批判	批判	概念	セックス	分析	私たち	差異	視点	影響
37	差別	女子	天皇制	政治的	職業	主張	変化	性差	状況	中心	対象	文化
38	人間	分析	皇室	関心	対象	言説	言説	変化	フェミニズム	日本	結果	重要
39	論争	メディア	対象	自由	男女平等教育	ボーヴォワール	歴史	文化的	労働	私たち	夫	家庭
40	子供	生徒	家	イギリス	研究	人間	生物学的	自分	規定	文化	個人	政治的
41	批判	自分	妻	地位	彼	カテゴリー	人々	重要	理由	意識	教育	身体
42	イリッチ	変化	視点	現在	過程	理解	政治的	世界	視点	フェミニズム	課題	現在
43	文化的	重要	広告	エスニシティ	選択	アイデンティティ	観念	指摘	認識	科学	影響	可能性
44	我々	現在	労働者	地理学	中心	立場	議論	権利	人	アイデンティティ	現実	政治
45	彼	地位	関係	共和主義	文化	消費	論文	仕事	立場	形成	権利	仕事
46	生活	展開	本社員	関係	結果	家族	フェミニズム	平等	変化	立場	仕事	表象
47	過程	男子	ケア	王位	胎児	条件	性差	参加	家庭	活動	家父長制	法
48	現実	利用	反乱	君主制	教師	自由	形成	国家	影響	概念	問い	領域
49	子	仕事	文化	実際	方法	賃金	夫	今日	女子	妻	彼ら	指摘
50	意識	人類学	変化	社会的	分析	議論	私たち	言葉	結婚	人	言説	立場

2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	フェミニズム	
女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	フェミニズム	1
男性	男性	問題	男性	女	男性	男性	男性	問題	男性	フェミニスト	2
問題	私	男性	問題	自分	問題	問題	問題	男性	国	女性	3
私	問題	女	子供	漱石	子供	子供	女	彼女	家族	ジェンダー	4
女	女	家族	家族	男性	男女	家族	日本	指摘	社会的	女性学	5
学習	家族	社会	女	私	社会	仕事	二宮	日本	男女	問題	6
視点	子供	自分	労働	男	社会的	日本	社会的	社会	ジェンダー統計	女	7
教育	自分	存在	仕事	日本	自分	男女	検討	介護	ケア	研究	8
課題	労働	意味	日本	研究	国	自分	男	存在	問題	批判	9
日本	彼女	男	自分	男女	日本	女	視点	私	データ	意味	10
関係	男	日本	社会的	問題	私	分析	労働	家族	活動	視点	11
意味	社会的	関係	私	妻	女	私	社会	女	存在	男性	12
社会的	男女	社会的	社会	彼女	意味	社会的	意味	検討	子供	私	13
彼女	社会	子供	関係	意味	家族	参加	研究	意味	社会	概念	14
研究	意味	仕事	ケア	子供	研究	研究	企業	マルクス	重要	主張	15
自分	視点	議論	彼女	関係	必要	ヴェーバー	家族	自分	マルクス	社会的	16
存在	夫	彼女	意味	言葉	活動	社会	関係	社会的	仕事	立場	17
社会	妻	私	結果	夫	予算	視点	批判	言葉	経済的	日本	18
指摘	存在	労働	評価	存在	影響	結果	存在	男	関連	議論	19
指標	子	夫	影響	社会	存在	関係	指摘	視点	意味	社会	20
社会教育	日本	結果	男	彼	関係	意味	男女	人々	生活	主義	21
重要	関係	妻	存在	社会的	結果	存在	子供	わたくし	報告	マルクス	22
家族	状況	権利	研究	健三	参加	賃金	差別	中心	影響	関係	23
役割	仕事	暴力	変化	指摘	役割	課題	前提	関係	結果	理論	24
国	制度	男女	家庭	分析	男	指摘	労働者	慰安婦	役割	彼女	25
市民	結果	法	重要	現在	現在	重要	仕事	エンゲルス	検討	フェミニズム理論	26
男	自由	言葉	現在	家庭	分析	経済的	私	男女	情報	課題	27
活動	調査	個人	政策	家	重要	労働	タイ	現在	分析	分析	28
関係性	母	状況	国	役割	指摘	議論	身体	文学	労働	家父長制	29
子供	議論	国	状況	議論	平等	メディア・リテラシ	本書	アイデンティティ	変化	展開	30
現在	分析	指摘	議論	結果	暴力	活動	経済的	時代	関係	男	31
家庭	介護	重要	視点	世界	仕事	変化	自分	子供	研究	理論的	32
影響	研究	自由	課題	生活	政策	男	歴史的	仕事	状況	存在	33
男女	現在	現在	役割	父	検討	役割	分析	ケア	統計	指摘	34
統計	言葉	国家	言葉	先生	人々	展開	規定	貧困	正級長	現在	35
検討	家庭	主張	地位	作品	議論	家庭	展開	身体	評価	運動	36
中心	家事労働	平等	指摘	結婚	映画	職場	課題	被害者	介護	主体	37
地域	差別	理由	利用	教育	権利	雇用	重要	理解	バランス	差異	38
人々	選択	実際	時代	人物	彼ら	国	考察	自ら	指摘	ラジカル	39
状況	評価	検討	活動	状況	理由	フェミニズム	広告	世界	可能	歴史	40
世界	平等	視点	世界	視点	家庭	主張	土台	労働	参加	政治的	41
形成	私たち	対象	生活	心	視点	労働者	現実	参加	組織	フェミニズム運動	42
内容	雇用	制度	ict	時代	彼女	対象	論理	認識	副級長	重要	43
ジェンダー統計	問い	規定	平等	主張	状況	生活	結果	分析	個人	女性文化	44
言葉	経済的	変化	家	重要	言葉	考察	議論	運動	指標	今日	45
立場	重要	行為	妻	仕事	政府	今日	家事労働	重要	利用	役割	46
展開	賃金	中心	夫	宣教師	課題	検討	二宮著作	奴隷制	家庭	家族	47
セクシュアリティ	役割	人間	サービス	母	家	男性ヘルパー	労働力	前提	人々	文化	48
議論	生活	役割	母親	彼ら	変化	現在	資本主義的	解釈	分野	性差	49
参加	現実	被害者	ワーク	家族	わたくし	権利	理由	意識	概念	文化的	50

【リスト1】ジェンダー言論における頻出語彙ランキング（続き）

	1980s	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000
51	結果	依存	雑誌	華人	社会化	必要	フェミニスト	従来	実際	労働	前提	構造
52	支配	構造	筆者	統合	議論	社会	理論	企業文化	理解	現在	表現	批判
53	形成	影響	社員	即位	文化的	理由	コルビュジエ	健康	労働者	分析	労働者	セクシャルハラスメント
54	重要	我々	配偶者	学生	精神的	家庭	ジンメル	国	教育	重要	主張	状況
55	今日	指摘	彼女	活動	歴史	意識	妻	課題	文化的	結婚	説明	男女
56	家事労働	論文	エスニシティ	母	重要	前提	説明	企業	概念	検討	労働	力
57	状況	拡大	個人	黒人	セクシュアリティ	分析	前提	私	言葉	主体	調査	アイデンティティ
58	対象	教師	ホズボーム	指摘	我々	完全	視点	影響	議論	わたくし	文化	変化
59	母	理由	調査	同化	階級	区別	制度	フェミニスト	地位	課題	中心	生活
60	性別	交換	分析	労働市場	差異	生活	家	検討	母	平等	主体	説明
61	理解	規定	結果	時代	現実	定義	時代	福祉	歴史	個人	人間	理論
62	展開	要因	強調	意見	女の子	可能性	解釈	歴史	世界	議論	歴史的	権力
63	マルクス	発展	我々	強制連行	男の子	自分	区別	傾向	事実	解放	文化的	被害者
64	個人	言葉	指摘	支持	女性的	批判	構築	男子	表現	言葉	経験	構築
65	議論	人々	紀子さま	発言	資本	文化	身体	議論	人間	力	差異	他者
66	学校	世界	人文地理学	主流派	影響	変化	教育	観点	課題	男子	領域	労働
67	抑圧	表現	言葉	結果	フェミニズム	食料	経済的	立場	時代	権利	理解	形成
68	自分	子	国	研究者	伝統的	仕事	力	形成	意識	実際	理由	自己
69	変化	わたくし	事実	結婚	妻	普遍的	世界	子供	現在	文化的	世界	人々
70	アメリカ	家庭	東京都	妻	男子	時代	指摘	批判	評価	主張	行為	人間
71	自由	事実	生活	参加	勉強グループ	政治	参照	会員	経済的	批判	具体的	前提
72	言葉	私	娘	影響	本稿	開発	歴史的	関心	開発	展開	身体	認識
73	歴史	対象	人種	理解	サブカルチャー	社会的	スキーマ	背景	セックス	現実	認識	世界
74	分析	差	議論	行動	側面	物語	理解	積極的	女性労働者	人間	母親	視点
75	女性文化	家事	影響	皇太子	必要	子供	デリダ	論文	現実	理由	セクシュアリティ	結婚
76	夫婦	現実	女性自身	性差別	事実	社会保障	我々	評価	彼	母	実際	表現
77	機能	考察	礼	日本人	母	労働力	実際	地域	行動	経験	人	イリガライ
78	差異	歴史的	老人	認識	傾向	過程	影響	前提	仕事	強調	可能	家
79	領域	アプローチ	伝統的	機会	オナニー	役割	仕事	労働	法律	一方	セックス	文化的
80	イリイチ	今後	企業	皇后	変化	構造	特徴	労働者	説明	経済的	アトリエ	現実
81	傾向	関心	年齢	息子	説明	維持	行動	イギリス	差別	参加	展開	解釈
82	女性学	中心	衣服	トルコ人	人	両性	福祉国家	政治的	保護	関連	表象	参照
83	指摘	フェミニズム	文化的	夫	要因	領域	現在	運動	家事労働	子	自然	検討
84	平等	伝統的	特徴	朝鮮人	実際	人々	伝統的	福祉国家	観念	行動	事実	実際
85	世界	差別	天皇家	見解	歴史的	関連	アイデンティティ	対象	男子	彼ら	性差	対応
86	説明	労働市場	移民	発想	多様	排除	状況	展開	個人	政治的	立場	娘
87	主義	家族	重要	マイノリティ	最近	政治学	展開	政治	可能性	問い	批判	展開
88	労働	観点	期待	イメージ	再生産	限定	自然	内容	差異	傾向	特徴	学校
89	現在	基準	認識	理由	認識	課題	強調	市民権	生活	ジルー	時代	理解
90	社会学	態度	報道	労働	概念	考察	特性	人間	批判	教師	アイデンティティ	課題
91	労働力	確立	民族	手紙	身体的	状況	批判	考察	国	理解	位置	理由
92	本質	ケア労働	生徒	君主	従来	歴史的	住宅	強調	賃金	法	方法	価値
93	制度	女性記者	意見	生活	構造	指摘	現実	個人	教科書	国	大学	欲望
94	親	マイノリティ	外国人	治世	母親	韓国	領域	問い	職業	行為	形成	母
95	コミュニケーション	諸関係	背景	注目	ヤンキーグループ	所有	可能	婦人	構造	構造	検討	考察
96	フラックス	社会化	ガラージ	意識	主体	部分	彼ら	特徴	契約	時代	経済的	中心
97	考え方	自然	皇太子	男女	結婚	目的	個人	我々	前提	地位	再生産	積極的
98	性差	領域	特別	最近	言葉	価値	哲学	人々	健康	愛	意識	セクシュアリティ
99	不平等	日本	男女	表現	原因	安定	構造	賃金	形成	家事	内容	個人
100	単位	批判	表現	権威	意識	奴隷	実践	最近	アイデンティティ	評価	他者	地位

2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	フェミニズム	
領域	文化	彼	雇用	立場	自由	世界	可能性	男性介護者	生産	影響	51
国際的	意識	生活	icts	国	概念	教育	世界	歴史的	認識	第二波	52
概念	母親	フェミニズム	経験	自由	実際	影響	彼女	経済的	基礎	構築	53
自由	個人	立場	参加	小説	差別	中心	主張	私たち	現在	ジェンダー研究	54
生活	今日	問い	分析	対象	個人	多様	認識	作品	政策	中心	55
参照	領域	前提	父親	意識	身体	差別	影響	主張	我々	抑圧	56
平等	人々	戦後	調査	人間	中心	前提	概念	課題	平等	セックス	57
仕事	変化	売春	経済的	人	教育	内容	現在	最後	ジェンダー平等	言葉	58
労働	主体	政治的	男女	道草	評価	個人	雇用	展開	多様	思想	59
権利	前提	選択	企業	鏡子	展開	事実	フェミニズム	生産様式	開発	アイデンティティ	60
個人	指摘	私たち	教育	影響	私たち	人々	マルクス	自由	エンパワメント	政治	61
変化	対象	わたくし	現実	中心	歴史	結婚	賃金	構成	提供	前提	62
家	理由	差別	中心	問い	対象	導入	男役	議論	世界	世界	63
暴力	課題	内容	育児	可能性	形成	参照	言葉	影響	政治的	認識	64
私たち	小説	参照	拡大	アメリカ	世界	経験	青柳	韓国	実現	解放	65
可能	世界	現実	賃金	言説	経済的	政策	他者	日本人	課題	参照	66
対象	婚姻	研究	可能性	傾向	主体	平等	再生産	結果	ブルン	セクシュアリティ	67
理解	保護	性別	高齢者	子	実施	性差別	実際	役割	ジェンダー問題	方法	68
政策	フェミニズム	差異	データ	活動	貧困	家事	責任	国民基金	暴力	問い	69
親密	時代	評価	内容	表現	責任	理由	内容	映画	中心	理解	70
報告	検討	目的	職場	展開	理解	実施	資本主義	経験	特徴	教育	71
運動	家事	身体	実施	現実	市民	法	原則	規定	政治	人々	72
実践	認識	批判	組織	変化	フェミニズム	アイデンティティ	登場	戦い	支援	対象	73
認識	文化的	排除	情報	本稿	生活	本書	私たち	トランス	国際的	批判的	74
映画	形成	少女	理由	ホルブルック	多様	評価	変化	変化	日本	検討	75
提案	不就学	日本人	アンペイトワーク	実際	立場	マッドサイエンティスト	家庭	田植え	不平等	可能性	76
メディア	権利	母	関連	参照	傾向	メディア	状況	研究	理由	領域	77
方法	労働法	経済的	フェミニズム	中国	政治的	可能性	中心	過程	視点	生物学的	78
可能性	傾向	時代	福祉	発言	焦点	男子	加盟国	発展	地域	平等	79
結果	父	政策	責任	参加	性別	八代	声	差別	自由	上野千鶴子	80
実際	パート	法律	今日	登場	制度	概念	参照	導入	エンゲルス	提起	81
表現	事実	今日	途上国	代助	女性史	拡大	理解	可能	マノレクス	結果	82
具体的	報告	ニュータウン	性別	論文	現実	歴史的	資本	歴史認識	考察	女性史	83
関連	ジェンダーバイアス	分析	判断	バイアス	可能性	男女平等	役割	結婚	教育	状況	84
テーマ	労働者	事実	検討	スポーツ	認識	国家	対象	共通	本稿	経験	85
情報	価値	意識	実際	理解	対応	収入	方法	理由	ライフ	自分	86
問い	中心	彼ら	概念	歴史	母	形成	人々	対象	彼女	男女	87
結婚	テーマ	認識	介護	性別	職場	人間	子	状況	介護者	自由	88
会議	展開	課題	開発	最初	組織	能力	自己	批判	ワーク	カテゴリー	89
文化的	離婚	フェミニスト	提供	区別	増加	バックグラウンド	青柳著作	可能性	形成	パトラー	90
構成	子育て	教育	積極的	実践	報告	紹介	政策	女優	十分	アプローチ	91
調査	ジョーン	基本的	可能	方法	男女共同参画	時代	母	戦争	制度	言説	92
定義	関連	可能	個人	身体	情報	規定	問い	国家	権利	フェミニスト的	93
身体	親	説明	生産	関心	可能	批判	上野	概念	諸国	労働	94
主体	国	責任	普及	理由	妻	自立仮説	国家	本書	国家	研究者	95
今日	人間	関連	人々	平等	過程	実際	適用	立場	区分	関心	96
時代	政治	セックス	増加	出産	内容	彼女	制度	デュブリ	給付	アメリカ	97
津田	承認	人権	コンフリクト	内容	基本的	構造	導入	基本的	形態	傾向	98
従来	地域	最初	雇用者	記述	経験	目的	一方	歴史	前提	現代	99
労働者	暴力	地位	制度	場面	関連	歴史	具体的	契機	労働者	性差別	100